

幕末期長崎落札貨物の動向

小 山 幸 伸

筆者はこれまで幕末期の長崎について、その市場としての性格を、利貸資本の存在形態と近隣諸藩との関係から分析を試み、そこから幕末期の長崎が有した金融市場・商品販売市場としての意義を考察してきた⁽¹⁾。その際に分析の中心とした利貸商人永見家は、同時に根証文方を任されるなど、その貿易商人としての性格も無視することはできない。永見家が有したこの二つの側面は、そのまま長崎市場の性格を表現するものでもある。

そこで本稿においては、当該期における長崎貿易の動向を確認するために、長崎県立長崎図書館が所蔵する永見家文書に残る「寄帳」を利用し、当該期の長崎貿易において落札された貨物の数量的動向について考察し、幕末長崎貿易の実態と、そこから見出せる近世社会における経済文化の一端を紹介したい。

1. 長崎貿易における薬種落札取引

近世における長崎貿易での輸入品は、大別すると、①生糸、②織物、③薬種、④荒物、⑤書籍の五種類に分けることができる⁽²⁾。これらの輸入品のうち、生糸・織物は近世前期の主要な輸入品であり、とりわけ近世前期の貿易制度である「糸割符制度」が示すように、生糸輸入こそが貿易政策の主眼であった。しかし生糸や織物は近世を通じて国産化され、その貿易制限政策と相俟って、徐々に輸入量を減少させるに至った⁽³⁾。そのいっぽうにおいて、薬種・荒物は中期以降その輸入量を増大させる傾向にあり、近世後期においては長崎の唐船貿易の実態は薬種貿易であったと言えよう。書籍は小間物扱いで、不急・不要なものとなされ、寛文8年（1668）には一旦輸入を禁止されている。そののち元禄10年（1697）に解除されたが、あくまでも定高外の商品として例外的な措置を受けている⁽⁴⁾。

近世後期における長崎貿易の主要輸入品となった薬種とは、主に唐船によってもたらされた商品であったが、後述するように、幕末期には「西洋薬種」の品目が多数見られるようになる。荒物とは、鉱物・染料・塗料・皮革・唐紙・砂糖が含まれる。近世中・後期におけるこれら薬種・荒物の輸入動向を知るための手掛かりとして、長崎貿易全般についての手控えである『明安調方記』がある⁽⁵⁾。同書には、「薬種荒物凡漬高積」と題する項目が

記され、そこには薬種・荒物87種の年輸入量と符丁による相場が記されている。これがそのまま輸入総量を示しているかは疑問であり、そこに記された数値は安永9年（1780）のものと考えられるが、後述するようにオランダ側史料に基づく輸入量とは数値が異なる箇所がある。したがってそれぞれに薬種輸入・国内流通上での異なる段階の数値を示している可能性がある。しかしこの史料によって、明和・安永期（1764～1780）における薬種の品種別輸入動向を知ることができ、そのうち量の上位を示したものが表1であり、価格の上位を示したものが表2である。⁽⁶⁾

長崎貿易における取引方法は、元禄期の長崎会所設立以後は、会所役人あるいは目利により、中国人・オランダ人から輸入品購入価格の基準となる標準価格が設定され、それに基づき購入された輸入品に対して、商品ごとに異なる「掛り物」を課し、落札商人がこれを入札し、その差額を会所の収入としたのであった。⁽⁷⁾さらにその後、大坂の薬種中買仲間から主要都市の卸商を経て小売に至るのである。したがって薬種・荒物には、元値・落札値・買出値・卸値・小売値の段階を経て価格設定がなされるものであるから、史料上の価格がどの段階を示すものなのか注意が必要である。

まず長崎貿易における元値決定は、貞享2年（1685）糸割符制度復活に伴い、生糸は糸割符仲間による一括取引とし、生糸以外は入札取引とされたが、正徳5年（1715）の正徳新例施行をもって、唐蘭輸入品は全て「値組」で買い取ることとなった。この「値組仕法」とその後の入札手続きを唐船を例に説明すると、次のような手順である。⁽⁸⁾

- ①唐船入港後に「積荷帳」を提出させ、唐通事が翻訳し、五ヶ所・長崎会所・町宿の順で写し取り、糸割符年寄が五ヶ所会所で入札商人を呼び集め写し取らせる。
- ②新地蔵に積荷を荷揚げ（丸荷役）後、その品目・数量の確認作業（精荷役）を実施。
- ③長崎奉行が形式的に積荷サンプルに目を通す「大改め」の後、入札商人への荷見せを行う。入札商人からの故障申し立てがなければ、長崎会所で「値組」を実施。但し、生糸の値組は唐人屋敷で実施。
- ④長崎会所の目利役が上方相場・輸入量・前年度買値などを勘案して品目ごとの見込み値を立て（値入れ）、「値入帳」を作成して長崎会所に持ち帰る。
- ⑤長崎会所では年番の請払役・吟味役・会所目付役らが「値入帳」によって、目利役の評価が妥当かどうか検討（値組評価）する。評価終了後に「値組帳」を作成し、長崎奉行のご覧に入れる。
- ⑥唐人を長崎会所に呼び出して「値組帳」を書き写させ、売手の唐人と、長崎会所調

表1. 安永9年頃輸入薬種・量順

	年漬高(万斤)	単価(匁)
1. 山帰来	10.0	上 4.3 下 1.8
2. 甘草	7.5	17.0
3. 藿香	7.0	2.7
4. 甘松	3.0	3.7
5. 白朮	2.5	8.2
黄芩	2.5	2.8
7. 太楓	2.0	7.5
大黄	2.0	5.7
山茱	2.0	5.0
丸藤	2.0	2.5
11. 黄芪	1.8	上 9.5 下 8.0

(註)『明安調方記』。

宮下三郎『長崎貿易と大阪』66頁より引用

表2. 安永9年頃薬種荒物落札値・価格順

	相場(匁)	年輸入量(斤)
1. 麝香	2500	200
2. 竜腦	900	600
3. 白蛇	65	200
4. 辰砂	大 55 砂 30	800
5. 木香	47	13000
6. 川鳥	40	700
7. 肉桂	35	15000
8. 紺青	上 35 下 22	300
9. 丁子	30	7000
10. 麻黄	28	1500
11. 全蝎	25	400
12. 胡椒	25	2000
13. 阿仙薬	上 25 下 17	5000
14. 胡黄连	22	700
15. 宿砂	20	6000

(註)『明安調方記』

宮下三郎『長崎貿易と大阪』156頁より引用

役・立会年番の町年寄・会所目付・吟味役・年番の諸目付・値組方唐通事らが話し合い買値（元値組）を最終決定する。

- ⑦長崎会所の元方会所に商品売捌きの看板（払看板）を出し、入札に付す商品および除物の品目・反数・斤数・落札代銀の支払期限・代銀納入場所・支払金銀の割合などを告知する。
- ⑧五ヶ所商人は看板に記された掛り物の率を承知した証文を、それぞれの糸割符年寄に提出し、長崎会所の札場で五ヶ所商人の入札を実施。但し生糸の入札は五ヶ所糸割符会所で行われた。
- ⑨実際の入札には入札商人は立ち会わず、彼らが雇い入れた「数合」が、入札場の格子に唐船一艘分の品分けを記した袋を多数掛け、その中に封書の入札を入れる。
- ⑩落札すると、長崎会所が出銀見積の勘定をし総出銀目録を作成し、落札商人の判を取った落札帳を添えて年番町年寄から奉行所に提出する。
- ⑪荷渡しの前日に、落札商人は糸割符年寄に落札商品をどこの誰に販売するのかを差紙

で提出する。

いっぽう蘭船の場合でも、出島の倉庫に荷揚げした商品の「積荷帳」を作成し、長崎会所の目利によって「値入帳」が作成される。これに基づき「値組帳」を作成し、カピタン部屋で値組が実施される。慣習的に3回目の指値を「手打値」として買値が決定され、長崎会所において唐船輸入品と同じ手順で五ヶ所商人による入札が行われた。もっとも蘭船の場合、その輸入商品は本方と脇荷に区分され、脇荷はオランダ東インド会社の社員個人貿易商品であるが、こちらは値組ではなく入札仕法で買値を決定した。⁽⁹⁾唐船の場合においても蘭船の場合においても、いずれも元値を決定しただけで、実際に長崎会所に商品が運び込まれる訳ではなく、あくまで名目的に長崎会所が購入し、国内商人に落札させる形式を取るものであり、次の落札が済んで初めて商品の移動が起こるのである。

この長崎貿易において、落札に参加する商人を「五ヶ所商人」とか「本商人」と呼ぶが、入札への参加にあたっては、次のような手続きとなっていた。⁽¹⁰⁾

- ①五ヶ所（京都・堺・長崎・江戸・大坂）それぞれの都市の掛り宿老に申し出て、その身元の確認を受け家質証文を提出し身元を保証してもらう。
- ②また落札商人がもし根証文高以上の入札を希望する時には、引当を出す。
- ③落札後、上納金に不足が生じた場合は家屋を売却させ、それでも不足の際には、本人・連帯保証人・親類・宿老の順で責任を持つ。
- ④この落札には商人が個別に参加するほか、「組合」と称するグループ参加も大坂・長崎では行われていた。とくに長崎では1年間は組合で入札を行わせ、信用獲得後に株を引き分けることになっていた。

森岡美子氏の研究によると、寛政10年（1798）の貿易仕法改革により、このような形で入札に参加した五ヶ所商人たちに対して、落札貨物の支払規定が厳重になったことが分かる。同改正により、落札貨物は根証文高の限度だけ津出しを許可するか、あるいは大坂の間屋が請負手形を銅座へ提出し、その信用が確認されれば根証文を立てたのと同じように津出しが許可された。森岡氏はこのようなことが可能となったことが、貸付根証文システムつまり長崎・大坂間の荷為替開始のひとつの条件になると指摘されている。その後も何度かの改正はあったものの、幕末まで荷為替は継続しており、長崎貿易落札に関与したものはごく少数のものに限定されていき、その利潤の発生は貿易本来の取引よりも、貸付根証文金利の方がより大きかったと結論づけられた。⁽¹¹⁾事実、明和6年（1769）に121名いた落札商人が、嘉永2年には表3に見られる8名に減少したことからも、落札商人が限定

表3. 嘉永2年落札商人

支配人名	落札名前	銀高(貫目)
堺宿老	貸付根証文	1000
伊東吉兵衛	阿部吉太郎	1000
同	吉田屋甚八	500
永見伝三郎	永見屋徳太郎	1000
天王寺屋貞助 ・越後屋武右衛門	大坂宿老貸付根証文 ・長崎原田茂吉支配	500
伊勢屋勘三郎	村上藤兵衛	500
同	同	500
品川徳三郎	阿部吉太郎	500
馬場弥七郎	松本屋久右衛門	500
菱屋久吉	田原屋佐太郎	500
天王寺屋宗助	原田茂吉	1000
越後屋宗助	中野用助	500

(註)『長崎諸御用留』五番(三井文庫)参照。

されていった様子が確認でき、越後屋三井家の長崎方であった落札商人中野用助に見られる如く、⁽¹²⁾落札商人たちもその自立性が近世後期には後退し、中央市場の大商人との関係性の中で存在していた様子が注目される。

長崎で落札された薬種は、大坂の唐物問屋に送られ全国へと流通した。長崎からの落札貨物は、陸路輸送する糸荷宰領か、海上輸送する糸荷廻船によって運ばれた。前者は40株40人、後者は35株35艘を定数とした。糸荷廻船は別名「堺糸荷廻船」とも呼ばれ、長崎落札貨物を堺へと廻送したが、元文期ごろよりその船数を減少させたため、元文4年(1739)には堺を除く四ヶ所より大坂船3艘を糸荷廻船として認めるよう長崎奉行に嘆願がなされ、それが承認されたため「堺・大坂糸荷廻船」という呼称が成立するようになった。⁽¹³⁾

上記のような輸送経路で上方へ運送された長崎貿易の輸入品は、京都・大坂・堺の長崎問屋に荷受けされることになる。この長崎問屋は、京都13軒・大坂21軒・堺12軒の問屋が存在するが、その成立は寛文・延宝期ごろであり、長崎貿易の統制政策との関係から、輸入品の国内流通を組織化する意図の下に成立したと考えられる。享保6年(1721)4月には大坂で「唐糸・反物五軒問屋」株が成立しているが、これは糸・反物を主に扱ってきた京都の長崎問屋と異なり、大坂の長崎問屋が糸・反物の他に、薬種・荒物類を混在して扱っていたため、糸・反物を主に荷受けした者が五軒問屋として株仲間化したものと考え

えられる。いっぽう享保9年2月には「唐薬種問屋」株が定められている。したがって、大坂の長崎問屋は唐糸反物問屋と唐薬問屋に分化していったのである。山脇悌二郎氏の指摘によると、安永6年（1777）版『難波丸綱目』には両者と併存する形で、「長崎問屋」が別記されており、単に二分されたのではなく、両者と狭義の「長崎問屋」も含めて広義の「長崎問屋」が構成されていたが、その後の寛政5年の史料からは、狭義の「長崎問屋」は既に取り残された存在で、両者の勢力争いからは脱落していたことが判明する。⁽¹⁴⁾

輸入薬種は、この大坂の長崎問屋から、道修町の薬種仲買仲間へと流通するのであるが、薬種仲買仲間も享保7年には124株で公認され、幕末には177株へと至っている。この道修町の薬種仲買が、全国における薬種流通の結節点として存在しており、彼らが薬種市場に与えた影響は大きいものであった。

したがってこのような流通構造の下、輸入薬種の国内流通においては、上方の市場的影響を受け、長崎の落札商人は、上方の市場動向に左右されるだけでなく、資本関係においても上方商人に従属する構造となったのである。

2. 貿易商人と貿易史料について

(1) 村上家について

長崎の落札商人として夙に有名な村上家は、後述する「乍憚口上覚」⁽¹⁵⁾によると、初代村上武兵衛が播州から長崎に下り井上市郎兵衛方で唐紅毛商売を開始し、長崎本博多町に居を構え同町の町人として井上武兵衛内組となり、その後「伊勢屋庄助」「村上卯兵衛」の二人名前で江戸会所の本商人となったことが分かる。

村上家の貿易関係史料には、『見帳』『集帳』『薬種荒物寄』『端物落札寄』などがあり、これらについては既に宮下三郎氏による詳細な研究があるので、詳述することは避け、同氏の研究を参考に簡単に触れておきたい。⁽¹⁶⁾

まず村上家文書中最多の量が現存する『見帳』であるが、これは入札の際に掲げられる看板から、品目数量を写し取り、商品の下見をして特徴を記したメモ帳であり、番船・番割・商品の量のほか、会所の元値・入札の上位三者の値段と屋号を書き入れるのが普通であった。同史料は、長崎県立長崎図書館に100冊余り、また杏雨書屋には200冊近くが残されている。次ぎに100冊以上が現存する『集帳』は、商品名ごとに入札量・入札単価の上位三者の値と屋号が引けるようにしたもので、得意先に配った営業用の帳面である。他に『薬種荒物寄』39冊がある。これは、長期に亘って輸入量と落札値を記録し、入札値

の予想資料とするために作成された帳面で、品目別に大きく分類し、その中で入札順に数量と落札価格の上位三者の値と屋号を記したものである。これと合わせて「端物落札寄」も現存している。

いっぽう同家が、両替商としての金融活動も行っていたことは、大坂商工会議所商工図書館所蔵の『両替出入帳』（8冊）・『一番両替帳』（2冊）・『二番両替帳』（2冊）・『三番両替帳』（3冊）・『預り帳』（5冊）・『大宝恵』（2冊）・『諸大宝恵』（1冊）と、長崎県立長崎図書館所蔵の『到着金銀并両替御届引替帳』（1冊）などから知ることができる。同家の利子率を調査・分析された水原正亨氏の研究によると、同家の利子率は、天保13年に発令された利息制限令以前は、月一步半（1.5%）が大部分であったが、同令によって月一步式となり、弘化3年末には天保の改革の実効性が薄れるに随い、元に戻っていったことが判明する。⁽¹⁷⁾水原氏は、近江商人中井家と比較され、中井家が月一步から七、八朱の利子率で貸し付けていることと比較し、村上家の利子率が東北地方並に高いことに注目され、商業未発達な地域では、商業利潤より利貸しの比重が増すのは当然だが、長崎という貿易商業都市において東北同様の利子率であるのは、落札販売しさえすれば多額の利益が得られるので、高利に見合うだけの資金需要が貿易で得られた為であろうと推論されている。確かに、落札貨物の転売は投機的要素が強く、そのため高利で借銀しても、少額資本が短期間に増大する可能性があり、高利でも需要があった可能性はある。しかし前述した如く、幕末期には落札への参加は村上家など数軒に限定されており、村上家の貸付先がどのように貿易に参加したのか、その点を含めて今後の検討課題であるが、村上家の内組として落札に参加した商人との間に、貿易資金の貸付などが存在した可能性は十分に考えられよう。また貿易品の取引を巡る為替関係と利貸がどのように結びついているかも検討しなければならない。

ところで前述した如く、長崎の落札商人は上方の資本との関係の下に貿易参加していたのであるが、村上家と中央都市の資本との興味深い関係を示す事実が「乍憚口上覚」に記されている。これは村上家が、文政8年（1825）に播州の村上七右衛門から訴えられた際に村上藤兵衛が作成した弁駁書である。同書は馬場誠氏によって既に全文紹介され、また水原正亨氏も全文を掲げ検討されているので、本稿ではまず村上七右衛門の訴訟内容と、村上藤兵衛の反論趣旨のみ箇条書きし、長崎の商人と中央都市の資本との関係を考察したい。

まず村上七右衛門の訴訟内容であるが、次の五点である。

- ①長崎の村上藤兵衛家の発端は、播磨の村上七右衛門が長崎に出店をし家屋敷を買い求め、藤兵衛の養父武兵衛を長崎店の名義人にしたものである。
- ②大坂へ送荷する落札貨物は、従来は藤兵衛の養父の弟善蔵が支配したが、善蔵の死後は村上七右衛門家が取扱い、利益の三歩は本家（村上七右衛門家）が取り、残り七歩は出店が取るようになっていた。ところが近年その配分が送られてこない。
- ③村上藤兵衛実父卯兵衛は、播磨より連れてきた使用人である。
- ④商売の勘定は勿論、その他全てにわたり本家が指図してきた。天明8年（1788）には初代の武兵衛より、長崎店の名義が後代に及び薄縁になり本家指図に従わぬ場合は、長崎店の名義を引き取られても文句は無い旨を記した一札が出されている。
- ⑤村上藤兵衛方が暖簾の印や店で使用する印に「丸之内二七」(㊦)を使用しているのは、村上七右衛門家の出店である証拠である。

これに対する村上藤兵衛の反駁は、次のような内容であった。

- ①先代武兵衛は長崎に下り、井上市郎兵衛の下で唐紅毛荷物商売を始め、商売が慣れたところで正式に長崎本博多町の住人となり、井上市郎内組となり落札荷物を取扱い、やがて伊勢屋庄助・村上卯兵衛の両名前江戸会所の入札株を取得して、江戸会所の本商人となったのである。このように自力で商いをしてきた商人であるから、播磨よりの入札の指図や資金供与も受けていない。
- ②大坂での荷物取扱いの配分金を送らなかったのは、文化8年（1811）に伏見屋九兵衛に送った荷物の代金を村上七右衛門が送金しないからである。
- ③実父卯兵衛は、養父武兵衛の妹を嫁としており、その関係で長崎に移り住むようになった。当初は武兵衛宅に居住していたが、その後浦五島町に住み落札荷物の商売を行っている。したがって使用人ではない。
- ④前述したように江戸会所本商人となったのは自力であり、その後も自立した経営を行っていた。しかし七右衛門が長崎に荷物代金を送金しないことや、出火などもあり、破産してしまい、江戸会所本商人株は放棄せざるを得なかった。養子となって家を潰す訳にもいかないので、現在は堺の上野屋富蔵に勧めて堺会所本商人株を購入させ、自分はその名義人として商売を行っている。したがって七右衛門の名義人ではないので、その指図を受ける謂われはない。
- ⑤印については武兵衛生来のものを使用しているに過ぎず、七右衛門の印を譲り受けた訳ではない。

この両者の論争は、他に決定的史料が発見されないために、いずれが真実を告げているのかは不明だが、村上藤兵衛の反駁④に示された、破産後の対応は興味深いものがある。自己資金で商売が不可能となった際に、上方商人の名義人となり商売を継続しているのであるが、これは当時の長崎と上方との商品流通および資本関係を前提にした、両地の商人の自然な結合形態であったのであろう。水原氏はその後村上家が独立したようであると推定されておられるが、⁽¹⁸⁾そのことは表3に示したように、村上藤兵衛の支配人名が伊勢屋勘三郎であることから確認されよう。当時の長崎貿易における落札取引は投機性が高く、内組という形での少額資本参加や、大資本の名義人となることから成長を遂げ、自分商いへと至る可能性もあったのであろう。

(2) 永見家について

長崎の永見家も文政年間頃から本商人として貿易に参加したのであろうことが推察される。文政末年から天保6年まではあまり大規模な落札は行っていないが、天保7年より品数・数量ともに大幅に増加していく。このことはまた、別稿で述べた長崎市中における利貸業務の発展傾向とも合致することであり、両業務が相乗的に永見家の経営を向上させていた様子を窺い知ることができる。⁽¹⁹⁾

天保7年より本格化した永見家による落札であるが、幕末に向かう中で長崎を代表する商人へと成長を遂げたようである。既に述べたように、嘉永2年の長崎会所に対する正銀500貫目の「正銀備」が実施されたときにも、永見家は、三井の貿易業務を担当した越後屋用助（中野用助）らとともに貿易許可が与えられた8名に加わっており、また嘉永6年の根証文制への変化においても、長崎会所に正銀100貫目を冥加銀として上納することを条件に、大坂の阿部吉兵衛・江戸の村上藤兵衛と共に根証文方に任用されている。⁽²⁰⁾

永見家に残された落札貨物に関する史料は、『薬種寄』『西洋薬種寄』『皮類寄』というように、落札商品ごとに帳面が作成され、大別すれば薬種類と荒物類ということになる。これらの寄帳は、現在長崎県立長崎図書館の所蔵であるが、これとは別に慶應義塾大学古文書室が所蔵する永見家文書には、安政開港期にオランダ船との間で行われた相対売買に関する帳面が残されている。そこからはゴロフクレン（呉路服連）などの反物類の輸入を行っていたことが確認でき、会所からの落札ではないが、永見家が薬種類・荒物類・呉服反物類という長崎貿易における主要輸入品全般にわたって取り引きしていた事実が判明する。

寄帳は、縦14cm・横20cmの横帳形式で、商品別に項目分類され、年次・番割ごとに数量・銀額などが記されている。現在長崎図書館に残されている帳面は、『薬種寄』が33冊、『西洋薬種寄』が16冊、荒物類に属するものが15冊存在する⁽²¹⁾。『薬種寄』は商品名をイロハ順に分類し、「イ印」「ロ印」「ハ印」「ニ印」「ホ印」「ト印」「チ印」「リ印」「ヲ印」「カ印」「タ印」「レ印」「ソ印」「ナラム印」「ウ印」「ク印」「ヤ印」「マ印」「ケ印」「フ印」「ユ印」「エ印」「テ印」「ア印」「サ印」「キ印」「ミ印」「シ印」「ヨ印」「ヒ印」「モ印」「セ印」「ス印」の33冊に分けられている。いっぽうの『西洋薬種寄』もイロハ順に分類し、「イロハニ印」「ホヘトチ印」「リヌルヲワカ」「ヨタレソ印」「ラムウ印」「ヤマケ印」「フコ印」「テ印」「ア印」「サ印」「キ印」「ユメミ印」「シ印」「エヒモ印」「セ印」「ス印」の16冊に分けられている。荒物類は、砂糖に関する『上白砂糖寄』『三盆白砂糖寄』『雪白砂糖寄』『氷砂糖寄』『出島白砂糖寄』『太白黒砂糖寄』の6冊と、『皮類寄』『鮫鰯寄』『小蘇木寄』『茶碗薬寄』『爪寄并牛馬寄』『唐木類寄』『釐丹寄』『白黒赤熊寄』『綿寄』の9冊からなる。以下次項において、それぞれいかなる商品が含まれていたのかを紹介し、近世後期における輸入貨物の傾向を検討する。

3. 落札貨物の動向について

(1) 主要落札薬種の性質

幕末期における長崎貿易で落札された輸入薬種は、先に表1・2に示した近世中期の輸入薬種と比較して如何なる特徴が見られるであろうか。いま永見家文書の「寄帳」より、幕末期の落札貨物の動向を示すと、表4～6の如くなる。『西洋薬種寄』に見られる落札薬種のうち、サフラン（3,945,946斤）・ウニコール（2,730,914斤）・藤（2,334,626斤）の3品は際立って輸入量が多いが、その他の各商品ごとの輸入数量は決して大きなものではなく、未だ唐船によりもたらされた薬種がその主流であったことは間違いない。しかしその商品の種類は、唐方薬種の257種に対して219種におよび、ほぼ同数となっている。これは文政3年（1820）の『舶載薬物録』の唐方329種・紅毛87種と比較すると、西洋薬種の飛躍的増加が見て取れる⁽²²⁾。薬種輸入量自体は、化政期をピークとしており、近世中期までの倍額の輸入を行っていた。しかるに、天保10年（1839）以降アヘン戦争の影響もあり輸入量は減少に向かった⁽²³⁾。いっぽう同時期以降の西洋列強の勢力伸張は、長崎貿易での輸入商品の拡大という面にも表れてきたのである。

では、『薬種寄』に見られる幕末期に輸入量の多かった唐方薬種を示すと、表7の如く

表 4 - 1. 「薬種寄」 記載貨物数量一覧(1)

商 品 名	数 量 (斤)	商 品 名	数 量 (斤)
イ印		砂子唐紙	682巻+150枚
淫末蕾	691.0	大唐紙	2,924帖
蛸皮	19,655.0	画心紙	380帖
郁季仁	6,754.5	藤黄	29櫃+28,713.5余
威靈山	162.0	杜仲	4,568.50
硫黄	8,821.0	独活	1,691.50
池麻	0.0	當帰	1,605.50
ロ印		兔絲子	7,453.00
蘆眼石	36,536.2	冬瓜漬	84.00
蠟石	94.8	紅麴	5,542.00
漏芦	欠	チ印	
ハ印		丁子	539,359.791
巴戟	2,626.00	沈香	38箱+129,760.153
柏子仁	5,489.50	智母	64,410.00
白蛇	12,848.92	猪苓	40,955.30
白蘇皮	11,801.00	猪貌堯	654.14
貝母	51,308.20	陳皮	194.00
莫太海	13,132.50	長石	1,600.00
巴豆	72,492.27	リ印	
番水竈	21,023.69	龍腦	22,274.408
梅花采	200.00	良姜	111,333.60
白堯	1,079.00	龍骨	15,779.84
白石脂	102.50	龍眼肉	90,799.9
桃草	5,417.00	ヲ印	
白扁豆	111.00	黄耆	5櫃+8丸+348,617.9
ハンヤ	568.00	黄芩	6櫃+827,385.41
ニ印		遠志	8,999.00
肉豆冠	20,431.66	雄黄	210,489.70
肉桂	5櫃+203,198.50	黄檗	1,380.00
肉從容	7,077.20	黄精	1,618.00
乳香	12櫃+86,258.00	黄連	欠
人參	43,327.20	カ印	
魚膠	1,087.00	甘草	7櫃+22俵+47丸+49介+2,098,520.65
人中黄	52.00	甘松	314,387.60
肉巴戟	27.00	何首馬	1,717.00
女貞子	0.00	甘遂	7,450.70
ホ印		海粉	160.00
硼砂	39,196.9	橄欖油	2,455.00
防已	3,285.0	橄欖漬	3,357.00
芒硝	22,328.0	海馬	22対+13尾
防風	9,584.5	海松子	2,070.00
補骨油	1,190.0	莞実	2,830.00
母丁子	8,700.0	莪朮	0.00
方解石	28.0	訶子	0.00
牡丹皮	2,119.0	タ印	
ポスホーリウム	1 瓶	大黄	20櫃+16瓶+20丸+2,241,149.65
墨膠	0.0	太楓子	302,399.25
ト印		太腹皮	135,972.30
唐紙	137,662束+38丸+32捆	大楮石	185.20
色紋唐紙	10,251巻+34.8束+10枚	大戟	2,432.00
貢紙	73,394巻+3,487帖	丹参	11.00
川蓮紙	1,252帖	澤泻	9.00

(註) 『薬種寄』 (長崎県立長崎図書館所蔵、17-183-1~33)

表 4-2. 「薬種寄」記載貨物数量一覧(2)

商 品 名	数 量 (斤)	商 品 名	数 量 (斤)
レ印		フ印	
連翹	18櫃+418,515.0	附子	204,032.5
羚羊角	37,433.26	覆盆子	4.5
零凌香	0	蕪異仁	1,256.2
荔枝	5,238.00	佛手棋漬	145
ソ印		茯苓	820
象牙	29本+78,861.892	佛青	700箱
蒼木	4丸詰2コ+936,372.00	コ印	
草案	14,479.20	紅花	9櫃+16,833.9
草豆蔻	4,477.40	紅樹皮	583,680.68
蘇合油	464.00	厚朴	17,431.92
草烏頭	3,816.00	紺青	197箱+237,159.2
皂莢子	233.00	午黄	421.906
桑白波	46.00	呉茱萸	6櫃+33,930.1
相思子	291.00	午膝	1箱+33,493.6
象油	0	五靈子	3,239.00
ナラム印		蜈蚣	252.60
鉛	385,866.00	胡黄連	7,295.90
雷丸	2,392.00	蜂真香	8,450.00
無苕異	78.00	虎骨	48.00
蘭桂油	0	蛤蚧	8,334.00
無食子	0	午房子	171.00
ウ印		午膽南星	23.32
茴香	1丸+211,121.8	琥珀	1曲+23,655.099
烏藥	15,177.30	藁本	1,231.50
烏炮	16,161.66	五味子	4,537.00
鬱金	410,987.70	香附子	1,850.00
雲母子	100.00	胡芦巴	834.00
漆	19.00	骨碎補	59.40
禹餘糧	439.00	工印	
ク印		延胡索	1箱+1丸+79,331.5
藿香	331,941.5	燕巢	3.9
群青	5,650.0	テ印	
滑石	6,615.1	蛛	39,299.3
爪萎仁	2,078.0	天文冬	379.0
口木	189.0	天南星	0.0
花乳石	157.8	天竹黄	2,305.8
槐花	1,750.0	停曆子	141.0
栗実	9,164.0	ア印	
薰香	0	安息香	12,909.30
ヤ印		阿膠	18,728.05
益智	34,571.5	阿仙藥	1,276,441.35
マ印		サ印	
麻黄	20丸+734,417.73	犀角	1箱+17,700.555
松脂	8,365.10	山奈	91,445.7
麻油	93.00	山帰来	11櫃+781,363.3
ケ印		酸棗仁	6櫃+13,948.8
桂枝	3櫃+7丸+545,037.7	山茱萸	1櫃+17,253.99
玄参	4,646.50	山豆根	8.5
莫実	3,930.00	山査子	4,347.0
桂子	1,685.00	鎖陽	0.0
荊芥	506.00	西洋江	0.0
憎務	23,164箱	山梔子	2,267.0

(註)『薬種寄』(長崎県立長崎図書館所蔵、17-183-1~33)

表4-3.「葉種寄」記載貨物数量一覧(3)

商 品 名	数 量 (斤)	商 品 名	数 量 (斤)
キ印		ヒ印	
牛角	2本+107,601	栴椰子	1,037,639.21
伽羅	2,359.99	白木	280,354.50
枳実	78,993.90	白止	45,209.30
枳殻	62,416.90	白羌蚕	22,922.36
亀板	22,439.70	草發	3,681.84
麒麟血	9,305.00	百部	0.00
羌活	1,043.30	白檀	欠
橘皮	1,767.00	白附子	0.00
杏仁	220.00	モ印	
金柑漬	17,774.00	木爪	1櫃+181,814.0
桔梗	17.90	木直	7,441.0
ミ印		木香	39箱+370,552.0
密蒙花	2,618.00	沒藥	21,086.7
密陀僧	1,373.88	沒葉子	150.0
蜜柑漬	10,633.00	木竈子	5,922.0
明礬	169,506.00	セ印	
シ印		石膏	1,618,598.70
麝香	2瓶+3,579.122	石黄	6,482.90
辰砂	2箱+19,401.355	金蜴	8,172.04
宿砂	65,914.50	醃酥	189.00
殊麻	935.00	川弓	5,814.00
沙参	5,466.00	川馬頭	1,612.50
紫梗	50,521.40	穿山甲	1,315.00
常山	10,176.50	青黛	6,160.00
狸園子	9,949.10	川練子	9,021.00
赤石子	15,270.00	石藍	50.00
使君子	9櫃+41,124.8	川積子	0.00
秦艽	2,268.90	石蟹	0.00
神麴	7,647.00	ス印	
麝虫	4,025.40	水銀	12箱+147,282.976
芍薬	4,950.00	錫	1,000,812.49
磁石	594.20	水晶	0.00
紫石英	4,390.75	水犀角	6,258.00
青皮	576.00	甦核	518.00
硃槩	1,400.00	砂紺青	52.00
辛異	135.00		
蜀椒	968.00		
硝石	2,977.00		
蛇会石	0.00		
ヨ印			
洋江	125包+598		
意似仁	1,200		
陽起石	0		

(註)『葉種寄』(長崎県立長崎図書館所蔵、17-183-1~33)

表5-1.「西洋薬種寄」記載貨物一覧(1)

商 品 名	数 量
イロハニ印	
イヘカコアナ	430.5斤+819瓶+250ポンド
蘆薈	16,419斤+1瓶+125ポンド
鹿角精	392斤
ローイウエイン	614硝子
ローズマイン油	8瓶
ロートウイット	1瓶
薄荷	1,173瓶+61硝子
ハルサンコッパイハ	274斤+289瓶+638硝子+278フラスコ
ハアレム油	7,299瓶
ハルトメリキュリアル	3斤
ハルサムキーフードルトック	17硝子
ハルクトー	1瓶
ハレルヤナ	320斤
ニタリスヤリコス	100瓶
ホヘトチ印	
ホトカル油	150斤+2,024瓶+907硝子
ホックホート	20,460.2斤+1瓶+560ポンド
ホフマン	73瓶+20硝子
ホーリシャルスト	33瓶+4斤
ホーラーキス	408瓶+30.3斤
ホフマントロップ	1,562瓶
ヘラトーナ葉	377斤+25ポンド
ヘルバユニイー	8斤
ヘイドロシャウタスポッタス	1瓶
ヘイテンホッタス	1瓶
ベイテンデクウイッキ	1瓶
ヘニセアーンセテルベテイン	50瓶
ヘレンス	278斤
藤	2,334,626斤
トルフルスフートル	42瓶
丁子油	37瓶
リヌルヲワカ印	
リイカハルサム	98瓶
リキュール	619瓶
ラクリカンキリ	7,619.5斤+121瓶+150ポンド
ラッセンカル	1,105瓶+5.7斤
ラントルソウト	5斤
ラフステユウラルトル	4斤
ラランシェーヲトリイ	10瓶
ラランシェー油	3瓶
ラーリユムコロトニー	10瓶
ラレイフ油	736硝子
ワウトンユル	1瓶
ワニルラ	3把
カミルレ	10,677斤+325ポンド
カロメル	841瓶+8.9斤
カナノラル	801斤
カヤコーデ油	1,188硝子+24フラスコ
カシヤボーム	20ポンド
カルモセセイロート	欠
カンタリーテユム	3斤
カストール油	66瓶+137フラスコ
カストールエレキテコム	47瓶
カスカリルラ	400斤+100ポンド

(註)『西洋薬種寄』(長崎県立長崎図書館17-184-1~16)

表5-2.「西洋薬種寄」記載貨物一覧(2)

商 品 名	数 量
ヨタレン印	
ヨテユム	1 瓶
ヨナテンホータリス	100瓶
痰切	22,252斤+500ポンド
タマリテン	11,510斤
タンハン油	23斤+25瓶
タンニ子	1 瓶
レンスウェイン	384瓶
レインオーリー	1 瓶
レインサート	100ポンド
ソートシュール	1 瓶
ソートシユムモリヒー子	20瓶
ラムウ印	
ラーヒスインフリナーリス	86瓶
ラアテイキスコロンホー	2,036瓶+100ポンド
ラクタスヘルリー	1 瓶
ラウタニユム	224瓶
ラヘントルオーリー	10瓶
ラーデキスガラーシ子ス	33斤
ラタニヤ	28.5斤+25ポンド
ラクシュス	1 瓶
ラウリールオーリー	4 瓶
ウエインステイン	635斤
ウエインステインシュール	808斤+7 瓶
ウニコール	2,730,914斤
ウイローク	3 斤
茴香油	5 瓶
ウテルムブードル	49瓶
ウイッテキーフトルトック	10瓶
茴香酒	8 瓶
ウチントルソート	30瓶
ヤマケ印	
椰子油	14,853硝子+3,375フラスコ
ヤラッパ	6 瓶+1,098斤+25ポンド+2 罐
ヤク子シャ	4,558.95斤+150ポンド+80硝子
マンナ	1,482斤
マガサーク油	1 瓶
マステイキヘルニス	1 瓶
ケンチャンウチルトル	2,615.7斤+150ポンド
ケルミス子ラル	6 斤+112瓶
月桂油	9.5斤+10瓶
ケシムルタルターリ	1,298斤+100ポンド
ケリイフルテカムフル	1 瓶
ケフランテアロイン	1 瓶
ケブリシビテールデクイッキ	1 瓶
ケチンソート	9 瓶
ゲーストファンシントル	50硝子
フコ印	
フリールフリーム	540.1斤+25ポンド
フラークウエインステーン	758瓶+54斤
フロインステーン	1,162.4斤
フロトヨテユル	1 瓶
フエラトリ子	1 瓶
ブーウステイン	1 瓶
フルスフトル	74斤

(註)『西洋薬種寄』(長崎県立長崎図書館17-184-1~16)

表5-3.「西洋薬種寄」記載貨物一覧(3)

商 品 名	数 量
フーフブラット	210斤
フリユフケアムニヤックキリスタル	1 瓶
ブルートローフハート	1 瓶
フエーストファミントル	50瓶
胡椒	223,217.55斤
ゴムアムモニヤック	2,325斤
琥珀油	225斤
コウトスワーフル	2.4斤+72瓶
コモヘラリウム	7 斤
コーセニイル	1,426.6斤+ 4 罐
コムテレメンテイン	953斤+50硝子
コムテレメン油	299斤
コーヒー豆	2,937斤+160罐+150袋
コロトニー油	20瓶
テ印	
テリヤアカ	46瓶+ 7 斤+7,888.7罐
テレメンテイン油	20斤+1,737硝子+660フラスコ
テユトヨテユルム	1 瓶
ティアハルム	7.2斤
テレメンテインワートル	1 瓶
テツベルゴロームシウレホットアス	1 瓶
テイターニユム	2 瓶
テレベンテイン油	28フラスコ
ア印	
アラビアゴム	124瓶+24,053斤+1,000ポンド
阿魏	1 瓶+5,644.6斤+200ポンド
アルニカウラルトル	677.9斤
アルカブルウム	1,510.2斤+50ポンド
亜麻仁	5,229斤+100ポンド
アネイストロップ	101斤
アルヲヤウラルトル	150斤
アセテユムフリユムヒー	235瓶
アマントル油	203瓶
アラキ	1,450硝子
アセタスフリユヒー	291瓶
アレッポアモニユムー	1 瓶
アサエンエートル積気	20瓶
阿片	976.76斤
アンチモーニーラクシダーチコム	47.1斤
アンチモーニーヨクセイダット	15瓶+ 6 斤
アマロット	4 瓶+1.5斤
アマントル	1,254斤
アンタラーユカリー	1 瓶
アロマチーゼシユルテンキテユール	1 瓶
アセイシユールロートオクセイタ	50瓶

(註)『西洋薬種寄』(長崎県立長崎図書館17-184- 1 ~16)

表5-4.「西洋薬種寄」記載貨物数量一覧(4)

商 品 名	数 量
サ印	
サフラン	80瓶+3,945,946斤+50ポンド
西国米	36瓶+80斤+22硝子
サボン	40,868.08斤+1,000箱
サルアルモニヤシ	1,072瓶+875斤
サアレップ	2,291.3斤+12.5ポンド
サスサフラス	698斤
サッサバルリラ	912.5斤+125ポンド
サルベイトル	33瓶+186斤
サッサハリラシトローフ	71瓶
サルヘトルシューレビスミット	80瓶
サルベートルシュール	9 瓶
サントラニー子	408瓶+560オンス
キ印	
キナナ	22,524斤+1,075ポンド
キナソート	2,289瓶+100罐
キュヘーブ油	17瓶
キイナテンキテユール	1 瓶
キュヤックハルスト	78瓶
キリストリセールテオビューム	4 瓶
ユメミ印	
ユングエントリユムビー	6 袋
ユングエントロキユリアル	11袋
ユングエントハシリキユル	13袋
ユングエントエモルリキユス	10袋
ユングエントシャヒー	11袋
ユングエントシンシー	4 袋
ユングエントウイットシンシー	6 袋
メンタキリシフ	185斤
メデシスコンホシタス	5 瓶
メラテンキキチユル	1 瓶
メリッセ油	5 瓶
メイルラ	1 瓶
ミイラ	518.33斤
ミンクト	30斤
シ印	
シキターリス	34瓶+2,815.5斤+200ポンド+15硝子
セェルプスワータ	648斤+36瓶
シェルフスマクネシア	37瓶
ジキユータ葉	41斤+12罐
シャンハンヤウエイン	1,380瓶
シェルパスモルヒー	1 瓶

(註)『西洋薬種寄』(長崎県立長崎図書館17-184-1~16)

表5-5.「西洋薬種寄」記載貨物一覧(5)

商 品 名	数 量
エヒモ印	
エキサタラクトヒヨシヤムス	1,092瓶+11斤+20袋
エイスランスモス	12,653斤+400ポンド
エンケルスウート	80斤
エフセムリート	80斤
エキスタラクトヘラトーナ	147瓶+5.5斤+2袋
エキスタラクトシキユータ	1,364瓶+60袋
エキスタラクトヘーフリメントキーリー	5瓶
エンゲルウォルトル	42斤+25ポンド
白檀	514,971.6斤
ヒヨシヤムスフラーテン	60斤
白檀油	3瓶
ヒヨシヤムス葉	1,716.59斤+100ポンド
ヒンケルキーリー	1瓶
ヒュックホート	958斤
ビスミュット	1.5斤
ヒットル	167瓶
セ印	
セーアユイン	4,775.1斤+150ポンド
センナフラーデン	3,884.3斤+200ポンド
セネーフルヨーリー	20瓶
セネーフル油	382瓶
セメンシーナ	10瓶+10,437.001斤+350ポンド
セネーフル	335硝子
ス印	
スホンス	6.25斤
スワーフルーブルーム	1瓶+450斤+シュール5つ
ステイレイグニーネ	2瓶
スフリーテスニットハルトルシス	1,677瓶
スタアルトヘーフル	10斤
スフリテスミンデルーリー	75瓶
ズワーフルミュルールホットアス	139瓶+1夕
スワーフルシウレソーダ	1瓶
スワーセコリーフ	6瓶
スタントオーリー	1瓶
ステレフニーナ	2瓶
スランカウオルトル	10ポンド
スプリマントル	180瓶

(註)『西洋薬種寄』(長崎県立長崎図書館17-184-1~16)

表6. 荒物類貨物数量一覧

商 品 名	数 量	商 品 名	数 量
砂糖類		塗模様皮	3 枚
上白砂糖	10,821,920.0100斤	模様附敷皮	7 枚
三盆白砂糖	1,051,772.9500斤	染皮	330枚
雪白砂糖	5,234,732.0000斤	ハルシヤ皮	257枚
氷砂糖	2,622,857.6900斤	釧丹寄	
出嶋白砂糖	10,554,644.8351斤	釧丹	3,622,964.5斤+24梱+2400掟
太白砂糖	11,866,668.2900斤	小蘇木寄	
太黒砂糖	195,181.0000斤	小蘇木	3,469,057.37斤
皮類寄		本蘇木	4,608,470.15斤+1123本+10箱
紅香牛皮	5,825枚	鮫鰯寄	
青香牛皮	7,047枚	鮫	435,966本+120枚
黒香牛皮	49,443枚	鰯	93本+3,599枚
赤皮	8,997枚	爪寄并牛馬寄	
白皮	18,686枚	爪	44,343.785斤
黒皮	13,490枚	牛爪	150,104.75斤
敷皮・片滑皮	410,551枚	馬爪	7,255.5斤
羊皮	240枚	唐木類寄	
虎皮	2 枚	栲木	24,460斤+2 本+2 枚
蛇皮	21枚	ヤム	795斤
印度皮	1,122枚	黒	38,950斤
兎皮	6,700枚	黄木	1,670斤
黒塗皮	24枚	紫	402,715斤
象皮	273枚	唐木屑	385斤
諸滑皮	1,380枚	鉄刀木	43,603斤
色附牛皮	81枚	赤木	1,600斤
蒲団皮	2,407枚	白黒赤熊寄	
皮座蒲団	12,591枚	白熊	10,066.7斤
形附牛皮	14枚	黒熊	1,087.3斤
赤形附皮	7,048枚	赤熊	4 斤
毛紋敷皮	1,780枚	綿寄	
水牛皮	151枚	綿	26,617斤
類違牛皮	33枚	茶碗薬寄	
金唐皮	51,726枚+4070斤+34丈17尺5寸	茶碗薬	253,894.25斤

(註) 『上白砂糖寄』・『三盆白砂糖寄』・『雪白砂糖寄』・『氷砂糖寄』・『出嶋白砂糖寄』
『太白黒砂糖寄』・『皮類寄』・『鮫鰯寄』・『小蘇木寄』・『茶碗薬寄』・『唐木寄』・
『爪寄并牛馬寄』・『釧丹寄』・『白黒赤熊寄』・『綿寄』(長崎県立長崎図書館所蔵)

表7. 幕末期唐方薬種輸入量上位

順位	薬種名	効 能	輸入総量 (単位・斤)
1	大黄	緩下薬	2,241,149.65 余
2	甘草	鎮痛・鎮痙	2,098,520.65 余
3	石膏	解熱・止渴	1,618,598.70
4	阿仙薬	止痢・止瀉	1,276,441.35
5	槟榔子	駆虫・健胃	1,037,639.21
6	錫	瘡薬	1,000,812.49
7	黄芩	解熱・治痢	827,385.41
8	山帰来	治梅毒	781,363.30 余
9	麻黄	発汗・鎮咳	734,417.73 余
10	紅樹皮	解熱・止瀉	583,680.68
11	桂皮	発汗・解熱	545,037.70

(註)『薬種寄』(長崎県立長崎図書館所蔵、17-183-1~33)

になる。いまそれぞれの効能をみるに、明らかに消化器官系の病に対する薬種輸入量が多かったことが判明する。勿論、表1に示した薬種にも「甘松」(健胃・整腸)・「大黄」(緩下薬)などがある。これに「黄芩」(解熱)や副作用を防ぐための佐薬として調合される「甘草」(鎮痛)などの輸入も、消化器官系の病に対するものに含まれるであろう。表7では「錫」と「山帰来」を除けば、ほぼ消化器官系の病気への対応を読み取ることができる。すなわち、その多くが「緩下薬」「止痢薬」「健胃」などの胃腸に働くものと、「解熱」であり、発熱を伴う激しい下痢に悩まされていた様子が判明するのである。近世期を通じて存在した消化器官系の急性伝染病として、赤痢や腸チフスが存在したが、これに加えて文政5年(1822)にはコレラが日本に流入し、幕末期に流行したことは周知のことであるが、そのことが輸入薬種の動向からも確認されるのである。このことは表1との比較からも判断され、「山帰来」という梅毒薬が輸入量1位であった時代に比べ、事態の深刻さが幕末期に増したことはほぼ間違いないところである。

コレラは激しい下痢と嘔吐で始まり、次ぎに激痛を伴う痙攣が起こり、体温が下がり、目・唇のまわりが暗黒色になり、排尿しなくなる。したがってコレラに対しては、下痢を止める治療を施す。蘭方医の治療では、まず下痢を止め、次ぎに発汗につとめ、その後血行を高める薬を与えたようである。西洋薬種に含まれる「アラビアゴム」は、そのために輸入されたものであろう。⁽²⁴⁾唐方薬種で同様の効能を持つものを表7より探ると、「大黄」

「阿仙薬」「紅樹皮」が見て取れる。コレラはその激しい下痢から「暴瀉」と呼ばれたが、阿仙薬の効能に見られる止瀉とは、暴瀉を止めるという意味である。輸入量第2位の「甘草」は副作用を防ぐための佐薬として用いられるため、輸入薬種の品種増加に伴いその使用量が増加し、輸入量の多さがそのまま一概にコレラの流行に対応したものとは断定できないが、その効能が鎮痛・鎮痙であり、コレラ発病に伴って起こる痙攣への対応で増加している可能性も無視できない。いっぽう漢方医はコレラに対してはまず発汗させるために、その効能を持つ「麻黄」「桂皮」を含む葛根湯や五苓散などを与えた。葛根湯は今日も風邪薬として知られるが、自然発汗がなく頭痛・発熱・悪寒などの症状がある患者に用いられる治療薬であることからわかるように、コレラ治療においても発汗を促すために用いられたのである。五苓散は下痢・悪心などの症状があり、体の水分不足により口が渇き、水を飲んでも尿量が少ないといった症状のある者に用いられ、コレラの諸症状に対応するものである。また下痢・嘔吐が治まった者には、のどの渇きを抑えるために竹葉石膏湯や白虎湯を与えたが、これらの薬に含まれたのが、止渴の効能がある輸入量第3位の「石膏」であった。⁽²⁵⁾

また赤痢は、はじめに悪寒・発熱が起こり、やがて激しい便意に襲われるが、いわゆる「シブリ腹」という症状を起こす。幼児期の小児が赤痢菌に感染すると中毒性のショック症状を引き起こすことがあるが、これを疫痢と呼ぶ。この赤痢の症状に対しても、表7に見られる薬種の多くが有用であったろうことが想像される。山脇悌二郎氏の研究によると、唐船が輸入した薬種総量のうち、コレラや赤痢などの痢病に用いられた生薬は、文化4年(1804)には64.6%、天保2年(1831)には61.1%に達することが知られる。⁽²⁶⁾近世後期の長崎における唐船貿易の主流は薬種貿易であり、その中心は痢病に対する生薬輸入であったことが判明する。

いっぽう『西洋薬種寄』において、その輸入量第1位のサフランと第2位のウニコールの効能は以下のようなものであった。サフランは優れた「発汗・解熱」の効能があり、化政期からは一般国民薬となり、悪性の痘・瘡・疹類が内攻して危険な諸症状を引き起こすことを防ぐために用いられた。⁽²⁷⁾ウニコールは、齒鯨イッカクの角のことであり、一角獣「ユニコーン」が転訛したものである。犀角の代替物として使用された。オランダでは解毒剤として用いたが、日本では今日でも小児用鎮静薬として知られる「奇応丸」「救命丸」などに含まれたもので、鎮静・解毒・解熱の効能をもつものとして用いられていた。⁽²⁸⁾

(2) 落札貨物の規模

上述のように、近世後期の長崎における唐船貿易においては、その主たる輸入品は薬種であった。そこで最後に、その代表的な薬種の輸入規模が幕末期にどのような傾向を示すのか述べておきたい。また荒物に属する砂糖も近世を通じて継続的に輸入されているが、幕末期におけるその輸入量の規模を紹介し、そこから若干の考察を述べたい。⁽²⁹⁾

①山帰来

山帰来は前述したように梅毒の治療薬であり、『明安調方記』によると安永9年ごろの輸入薬種中輸入量第1位の生薬であった。17世紀中頃から19世紀初頭におけるその輸入動向を示すと表8のごとくである。表1では安永9年頃の輸入高として10万斤と記したが、表8ではその2倍以上の数値が記されている。この表の数値は、オランダ商館の日記などに記された唐船貨物輸入量であり、長崎貿易において競合関係にあったオランダ側は常に唐船貿易の動向に注目しており、おそらくは長崎の役人からその貿易情報を収拾していたものと思われる。したがって、その数値は唐船舶載量を示すものであり、持ち帰り品なども当然あったろうから、この数値も厳密な意味で輸入量とは呼べない。しかしかなりの精度で実態を反映しているものと考えられる。本稿では表8の数値に信を置き、幕末期の落札量を年次別に示した表9の数値と対比させることとしたい。

表8によると山帰来輸入量が判明する14年間における輸入総量は297万6,390斤であり、年平均21万2,599.28斤であった。17世紀においては最大輸入量を示す年でも14万3,200斤であり10万斤を下まわる年もあったが、18世紀以降は最低でも16万斤となっており、とりわけ18世紀以降の輸入量が増加した様子が伺える。これに対して幕末期におけるその落札量は、天保7年（1836）より文久2年（1862）までの27年間ににおける落札総量が78万1,363.3斤余であり、年平均2万8,939.38斤程であることが判明する。因に表4-2に見える禹餘糧とはヴェトナム中部地方での山帰来の一般的呼称であり、これも山帰来落札量に加えるべきであるが、これを加えたとしてもなお近世中期のおよそ1割に規模が縮小していたのであった。

②大黄

①に対して、幕末期の落札量の第1位が大黄であり、前述のごとく緩下薬であり、近世後期の痢病治療薬を中心とした生薬輸入傾向を示すものである。表10は明和元年（1764）から天保2年（1831）における大黄の輸入量を示し、23年分の統計での

表 8. 山帰来輸入量

暦 年	輸入量 (斤)
1641 (寛永18)	77,310
1644 (正保元)	54,810
1650 (慶安 3)	143,200
1653 (承応 2)	105,930
1657 (明暦 3)	87,880
1711 (正徳元)	195,240
1754 (宝暦 4)	681,250
1755 (宝暦 5)	218,123
1761 (宝暦11)	183,815
1764 (明和元)	166,600
1778 (安永 7)	284,980
1780 (安永 9)	204,200
1783 (天明 3)	351,100
1813 (文化10)	221,952

(註) 山脇悌二郎『近世日本の医薬文化』
(平凡社、1995年) 13頁より引用

表 9. 幕末期の山帰来落札量

暦 年	落札量 (斤)
天保 7 (1836)	16,890.0
天保 8 (1837)	89,700.0
天保 9 (1838)	37,300.0
天保10 (1839)	27,476.0
天保11 (1840)	6,700.0
天保12 (1841)	47,120.0
天保13 (1842)	4,821.0
天保14 (1843)	9,971.0
弘化元 (1844)	19,788.0
弘化 2 (1845)	28,772.0
弘化 3 (1846)	43,386.0
弘化 4 (1847)	29,626.0
嘉永元 (1848)	35,788.0
嘉永 2 (1849)	11櫃と41485.5
嘉永 3 (1850)	26,599.0
嘉永 4 (1851)	20,499.0
嘉永 5 (1852)	30,934.2
嘉永 6 (1853)	20,583.0
安政元 (1854)	34,588.0
安政 2 (1855)	19,856.0
安政 3 (1856)	42,679.0
安政 4 (1857)	19,177.2
安政 5 (1858)	12,005.0
安政 6 (1859)	21,382.0
万延元 (1860)	11,638.4
文久元 (1861)	11,100.0
文久 2 (1862)	81,460.0

(註)『薬種寄』(長崎県立長崎図書館)より作成

輸入総量は156万5,330斤であり、年平均6万8,057.8斤であった。その後の天保7年から文久2年までの27年間ににおける落札量は、表11のごとくであり、その総量は224万1,149.65斤余、年平均8万3,005.54斤程の落札量を示している。また表10においても、前半の18世紀後期よりも19世紀に入ってからの方が輸入量が増加しており、さらに表11に見られる19世紀中期にも、その輸入量規模は継続している。したがって緩下薬である大黄は、19世紀に輸入量が増大するのであるが、これは従来から日本に存在する赤痢などの痢病に加え、19世紀に入りコレラが流入することにより、よりそ

表10. 大黄輸入量

暦 年	輸入量 (斤)
1764 (明和元)	5,700
1765 (明和2)	11,000
1766 (明和3)	9,000
1767 (明和4)	5,200
1768 (明和5)	47,501
1769 (明和6)	139,582
1770 (明和7)	16,232
1785 (天明5)	86,969
1786 (天明6)	130
1787 (天明7)	144,655
1788 (天明8)	輸入なし
1789 (寛政元)	同 上
1790 (寛政2)	同 上
1793 (寛政5)	34,050
1798 (寛政10)	28,718
1799 (寛政11)	64,209
1800 (寛政12)	107,967
1801 (享和元)	103,533
1802 (享和2)	55,459
1803 (享和3)	183,745
1804 (文化元)	182,774
1815 (文化12)	53,500
1817 (文化14)	96,851
1818 (文政元)	115,680
1821 (文政4)	11,140
1831 (天保2)	61,735

(註) 山脇悌二郎『近世日本の医薬文化』
(平凡社、1995年) 233頁より引用

表11. 幕末期大黄落札量

暦 年	落札量 (斤)
天保7 (1836)	49,700.00
天保8 (1837)	148,430.00
天保9 (1838)	121,030.00
天保10 (1839)	131,902.00
天保11 (1840)	16丸と59,561.00
天保12 (1841)	89,480.00
天保13 (1842)	37,657.00
天保14 (1843)	82,010.00
弘化元 (1844)	125,851.00
弘化2 (1845)	128,225.70
弘化3 (1846)	129,988.79
弘化4 (1847)	106,168.00
嘉永元 (1848)	154,176.50
嘉永2 (1849)	20櫃と110,657.00
嘉永3 (1850)	93,503.60
嘉永4 (1851)	74,463.25
嘉永5 (1852)	65,719.50
嘉永6 (1853)	77,029.90
安政元 (1854)	34,850.00
安政2 (1855)	12,673.40
安政3 (1856)	22,652.00
安政4 (1857)	21,441.46
安政5 (1858)	92瓶と38,892.00
安政6 (1859)	61,110.75
万延元 (1860)	61,487.50
文久元 (1861)	114,105.70
文久2 (1862)	88,383.60

(註)『薬種寄』(長崎県立長崎図書館)より作成

の需要を増大させたことを示している。

③砂糖

近世における砂糖輸入に関しては、既に岩生成一氏の研究や山脇悌二郎氏の研究が存在し、また近年八百啓介氏が精力的に取り組んでおられる。⁽³⁰⁾これらの先行研究に依拠しつつ、幕末期の砂糖落札量との比較を試みたい。

表12および表13はオランダ側史料から判明した近世における砂糖輸入量を示したものである。唐船貿易において数値が判明する85年分の年平均輸入量は、およそ

表12. 唐船砂糖輸入量

暦 年	数 量 (斤)	暦 年	数 量 (斤)
1637 (寛永14)	1,600,000.0	1768 (明和 5)	2,078,237.0
1639 (寛永16)	1,140,450.0	1769 (明和 6)	2,923,201.3
1640 (寛永17)	1,217,907.0	1770 (明和 7)	2,123,861.0
1641 (寛永18)	5,750,500.0	1771 (明和 8)	2,142,377.0
1642 (寛永19)	432,900.0	1772 (安永元)	904,372.0
1643 (寛永20)	0.0	1773 (安永 2)	2,308,305.0
1644 (正保元)	1,417,550.0	1774 (安永 3)	1,950,396.0
1645 (正保 2)	3,377,800.0	1775 (安永 4)	2,104,205.0
1646 (正保 3)	1,203,100.0	1776 (安永 5)	983,740.0
1648 (慶安元)	103,083.0	1777 (安永 6)	1,448,259.0
1649 (慶安 2)	737,250.0	1778 (安永 7)	1,047,925.0
1650 (慶安 3)	797,110.0	1779 (安永 8)	1,943,443.0
1651 (慶安 4)	413,250.0	1780 (安永 9)	1,802,780.0
1652 (承応元)	1,236,000.0	1781 (天明元)	1,661,539.0
1653 (承応 2)	774,220.0	1782 (天明 2)	862,993.0
1654 (承応 3)	644,361.0	1783 (天明 3)	1,815,809.0
1655 (明暦元)	1,731,480.0	1784 (天明 4)	1,751,386.0
1656 (明暦 2)	1,870,260.0	1785 (天明 5)	2,166,009.0
1657 (明暦 3)	711,610.0	1786 (天明 6)	866,009.0
1658 (万治元)	1,686,335.0	1787 (天明 7)	978,121.0
1659 (万治 2)	3,113,600.0	1788 (天明 8)	1,264,981.0
1660 (万治 3)	1,241,636.0	1789 (寛政元)	1,742,233.0
1661 (寛文元)	988,790.0	1791 (寛政 3)	2,483,745.0
1662 (寛文 2)	3,933,393.0	1792 (寛政 4)	2,520,617.0
1663 (寛文 3)	2,104,536.0	1793 (寛政 5)	2,176,135.0
1664 (寛文 4)	2,391,514.0	1794 (寛政 6)	709,468.0
1665 (寛文 5)	2,577,121.0	1795 (寛政 7)	2,089,215.0
1680 (延宝 8)	2,418,134.0	1796 (寛政 8)	1,394,097.0
1682 (天和 2)	2,600,165.0	1798 (寛政10)	660,565.0
1683 (天和 3)	2,130,644.0	1799 (寛政11)	1,043,169.0
1755 (宝暦 5)	530,680.0	1801 (淳和元)	2,448,524.0
1756 (宝暦 6)	676,000.0	1805 (文化 2)	1,646,454.0
1757 (宝暦 7)	1,833,400.0	1806 (文化 3)	417,240.0
1758 (宝暦 8)	1,512,300.0	1807 (文化 4)	241,000.0
1759 (宝暦 9)	822,156.0	1808 (文化 5)	436,940.0
1760 (宝暦10)	2,087,617.0	1809 (文化 6)	672,335.0
1761 (宝暦11)	1,173,580.0	1810 (文化 7)	355,108.0
1762 (宝暦12)	1,673,690.0	1814 (文化11)	749,400.0
1763 (宝暦13)	2,798,691.0	1817 (文化14)	499,150.0
1764 (明和元)	1,187,103.0	1818 (文政元)	427,000.0
1765 (明和 2)	245,623.0	1821 (文政 4)	948,935.0
1766 (明和 3)	2,886,558.0	1822 (文政 5)	627,800.0
1767 (明和 4)	86,280.0		

(註) 岩生成一「江戸時代の砂糖貿易について」(『日本学士院紀要』31巻1号)参照。

表13. 出島オランダ商館砂糖輸入量

暦 年	数 量 (斤)	暦 年	数 量 (斤)
1689 (元禄 2)	78,312.8	1753 (宝暦 3)	1,119,381.7
1690 (元禄 3)	127,311.2	1754 (宝暦 4)	1,518,190.8
1691 (元禄 4)	193,496.8	1755 (宝暦 5)	1,656,391.9
1692 (元禄 5)	411,270.4	1756 (宝暦 6)	1,550,477.5
1693 (元禄 6)	659,923.2	1757 (宝暦 7)	1,518,156.3
1694 (元禄 7)	934,844.8	1758 (宝暦 8)	771,221.7
1695 (元禄 8)	374,441.6	1759 (宝暦 9)	2,292,395.8
1696 (元禄 9)	474,104.8	1760 (宝暦10)	1,583,477.5
1697 (元禄10)	875,217.6	1761 (宝暦11)	1,582,947.5
1702 (元禄15)	1,311,800.8	1762 (宝暦12)	1,501,557.5
1703 (元禄16)	1,459,140.8	1763 (宝暦13)	792,185.8
1704 (宝永元)	1,512,225.8	1764 (明和元)	1,042,013.3
1705 (宝永 2)	1,145,540.0	1765 (明和 2)	626,526.7
1706 (宝永 3)	1,336,470.8	1766 (明和 3)	1,358,600.0
1707 (宝永 4)	1,184,367.5	1772 (安永元)	1,002,221.7
1708 (宝永 5)	847,495.8	1774 (安永 3)	743,520.0
1709 (宝永 6)	1,159,178.3	1775 (安永 4)	584,531.7
1710 (宝永 7)	1,247,679.2	1776 (安永 5)	1,085,213.3
1711 (正徳元)	1,167,445.0	1777 (安永 6)	835,936.7
1712 (正徳 2)	1,158,074.2	1778 (安永 7)	835,526.7
1714 (正徳 4)	757,891.7	1779 (安永 8)	918,860.8
1715 (正徳 5)	840,038.3	1781 (天明元)	0.0
1716 (享保元)	792,750.0	1785 (天明 5)	631,290.8
1717 (享保 2)	606,039.2	1786 (天明 6)	1,168,251.7
1718 (享保 3)	746,518.3	1787 (天明 7)	1,085,315.8
1721 (享保 6)	1,219,541.7	1788 (天明 8)	1,166,708.3
1722 (享保 7)	367,940.0	1789 (寛政元)	1,380,768.3
1723 (享保 8)	1,147,983.3	1790 (寛政 2)	670,078.3
1724 (享保 9)	372,466.7	1791 (寛政 3)	0.0
1725 (享保10)	693,527.5	1792 (寛政 4)	750,088.3
1726 (享保11)	644,619.2	1793 (寛政 5)	750,021.7
1727 (享保12)	628,103.3	1794 (寛政 6)	750,701.7
1737 (元文 2)	958,795.0	1795 (寛政 7)	750,017.5
1739 (元文 4)	835,419.2	1797 (寛政 9)	416,666.7
1740 (元文 5)	835,431.7	1798 (寛政10)	416,666.7
1741 (寛保元)	391,230.8	1799 (寛政11)	208,041.7
1742 (寛保 2)	591,745.0	1800 (寛政12)	576,041.7
1743 (寛保 3)	508,820.0	1801 (享和 1)	250,000.0
1745 (延享 2)	1,140,969.2	1802 (享和 2)	0.0
1747 (延享 4)	1,670,690.0	1803 (享和 3)	384,207.5
1748 (寛延元)	1,010,835.0	1805 (文化 2)	783,171.7
1749 (寛延 2)	1,667,858.3	1806 (文化 3)	1,058,065.0
1750 (寛延 3)	1,836,474.2	1807 (文化 4)	894,474.2
1751 (宝暦元)	1,583,540.0	1808 (文化 5)	0.0
1752 (宝暦 2)	1,501,950.8		

(註) 八百啓介『近世オランダ貿易と鎖国』(吉川弘文館、1998年)参照。

なお1697年以前は1斤=1.25ポンドで換算し、1698年以降は1斤=1.20ポンドで換算した。

150万斤である。これに対して各種の『砂糖寄』より判明する幕末期の落札量を示すと表14のごとくであり、年平均落札量は156万8千斤強を示す。輸入量と落札量は同質のものではないが、ここでは大まかな傾向を把握するために両者を比較しておきたい。表14の数値は、表12に見られる唐船による輸入砂糖のうち18世紀中の43年間分の年平均値とほぼ近似しており、とりわけ図1に示した落札量の推移からも判明するように、嘉永5年（1852）頃までは総量が100万斤を越えており、開港前の段階では、唐船による輸入砂糖の17世紀30年分の年平均値167万8千斤強の数値と比較しても大きく見劣りするものではなかったことが判明する。しかし表12に見られる19世紀中の12年分においては、年平均78万9千斤程であり、それ以前の輸入量のおよそ半分になっている。19世紀初頭における唐船での砂糖輸入量減少の傾向は、表14における砂糖落札量からは見られず、19世紀半ばには再び砂糖輸入が活発に行われた様子を示す。

いっぽうオランダ貿易における18世紀の砂糖輸入について、八百啓介氏は以下のような指摘をされている。①17世紀末の元禄期には、オランダ貿易全体の拡大のなかで、砂糖輸入量は急速に拡大し、多大な利益をもたらした。②しかし1710年代になると、正徳新例を転機として、来航数の制限の中で、取引高の維持を最優先事項とせねばならない貿易状況のなかでは、オランダ船の貨物容量を最大限活用する必要があり、高価軽量の商品を多数積載するために、船舶のバラスト（底荷）的性格をもつ砂糖は制限された。③1740年代に入ると、取引高全体が半減し、砂糖輸入を制限していた要因が緩和されるなかで、砂糖輸入量は再び増加した。④そして1750年代の宝永期には、取引高全体が停滞したオランダ貿易において、砂糖は最も重要な輸入品となった。⑤18世紀の国内における輸入砂糖の需要の伸びは、砂糖が従来の奢侈品から商品へと社会的性格を変化させたことを示す。⁽³¹⁾

八百氏が指摘した通り、近世を通じて砂糖需要は拡大したことは間違いなく、そのため貿易による貴金属流失を抑制しようとした新井白石が国産化を意図したことは、既に別稿で述べた通りである。⁽³²⁾ もちろん為政者の国産化の意図と、その実現にはタイムラグが存在する。砂糖も近世後期には国産化に成功してはいるが、その増大する社会的需要を賄うほどには、国産品（和砂糖）の生産は達成されなかったと見るべきであろう。

表14の砂糖落札量総計の推移を7種類の商品別に分類したものが図2であり、各

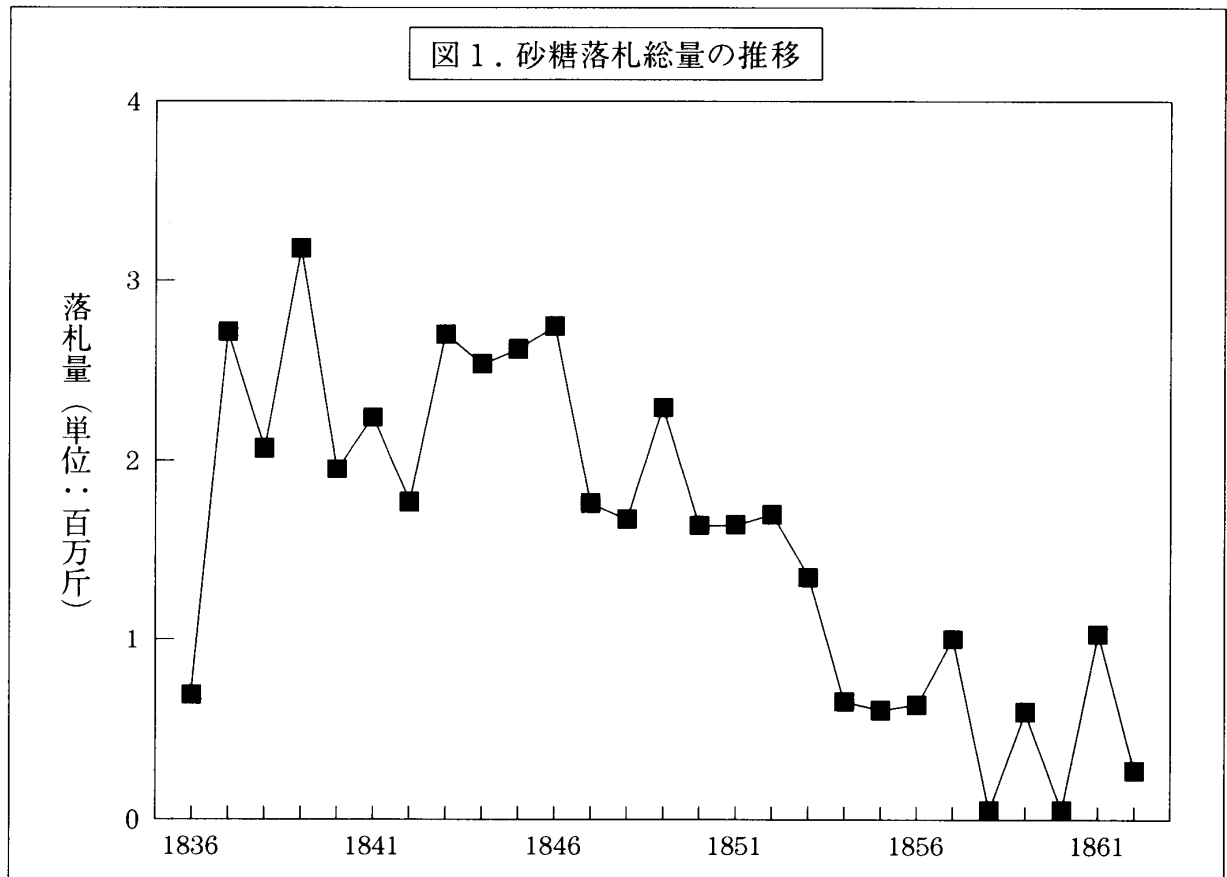
表14. 各種砂糖年次別落札量（単位：斤）

年 次	上 白 砂 糖	三盆白砂糖	雪 白 砂 糖	氷 砂 糖
天保 7 (1836)	68,985.00	11,710.00	59,600.00	59,876.50
天保 8 (1837)	826,740.00	17,264.00	366,403.00	261,274.00
天保 9 (1838)	633,900.00	33,400.00	393,000.00	169,300.00
天保10(1839)	707,030.00	86,200.00	402,100.00	513,978.00
天保11(1840)	555,200.00	74,200.00	215,980.00	237,960.00
天保12(1841)	971,940.00	57,300.00	319,000.00	139,560.00
天保13(1842)	364,210.00	26,200.00	133,430.00	99,440.00
天保14(1843)	449,552.00	31,112.00	444,160.00	176,779.00
弘化元(1844)	756,090.00	7,501.00	395,780.00	195,528.00
弘化 2 (1845)	769,293.00	25,406.20	313,333.00	95,699.50
弘化 3 (1846)	682,626.10	45,974.90	221,257.00	55,951.10
弘化 4 (1847)	436,970.00	13,199.00	343,032.00	31,760.15
嘉永元(1848)	406,804.50	2,218.50	150,044.00	15,498.50
嘉永 2 (1849)	556,765.72	78,079.70	193,816.00	81,969.10
嘉永 3 (1850)	446,816.00	40,342.95	133,413.00	92,763.20
嘉永 4 (1851)	492,235.00	134,988.00	132,644.00	62,960.70
嘉永 5 (1852)	523,735.59	87,595.00	136,930.00	38,158.94
嘉永 6 (1853)	219,329.00	109,541.80	153,928.00	13,979.20
安政元(1854)	86,931.00	76,279.00	45,824.00	57.00
安政 2 (1855)	11,286.40	25,941.00	0.00	5,691.40
安政 3 (1856)	165,169.00	1,710.00	79,012.00	31,949.90
安政 4 (1857)	98,701.00	16,719.20	70,319.00	18,931.20
安政 5 (1858)	600.00	1,265.90	0.00	471.50
安政 6 (1859)	332,254.00	3,221.00	23,000.00	60,246.50
万延元(1860)	0.00	10,721.80	0.00	22,604.30
文久元(1861)	146,019.70	26,500.00	447,577.00	68,320.00
文久 2 (1862)	112,737.00	7,182.00	61,150.00	72,060.00
商品別合計	10,821,920.01	1,051,772.95	5,234,732.00	2,622,857.69

（註）「上白砂糖寄」・「三盆白砂糖寄」・「雪白砂糖寄」・「氷砂糖寄」・「出島白砂糖寄」・
「太白黒砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵）

幕末期長崎落札貨物の動向

出嶋白砂糖	太 白 砂 糖	太 黒 砂 糖	年次別合計
413,734.0000	79,170.00	840.00	693,915.5000
425,433.0000	831,170.00	0.00	2,728,284.0000
456,733.0000	384,300.00	0.00	2,070,633.0000
494,619.0000	980,210.00	2,470.00	3,186,607.0000
328,290.0000	544,930.00	850.00	1,957,410.0000
0.0000	760,500.00	1,140.00	2,249,530.0000
668,320.0000	477,450.00	0.00	1,769,050.0000
772,738.0000	730,389.00	97,300.00	2,702,030.0000
448,100.0000	754,781.00	0.00	2,557,780.0000
444,613.9997	985,536.00	0.00	2,633,881.6997
617,066.9990	1,131,290.05	0.00	2,754,166.1490
503,111.0000	437,688.00	0.00	1,765,760.1500
522,185.1900	589,129.50	0.00	1,685,880.1900
806,493.6648	578,180.47	0.00	2,295,304.6548
451,061.6668	481,232.80	120.00	1,645,749.6168
404,106.6668	425,145.50	0.00	1,652,079.8668
406,003.6500	520,964.30	0.00	1,713,387.4800
639,241.0000	214,177.50	0.00	1,350,196.5000
351,681.0000	103,094.50	0.00	663,866.5000
539,828.6660	25,952.00	0.00	608,699.4660
164,509.6660	198,509.00	0.00	640,859.5660
696,774.6660	102,612.07	0.00	1,004,057.1360
0.0000	49,971.50	637.00	52,945.9000
0.0000	180,534.70	0.00	599,256.2000
0.0000	16,511.40	10,224.00	60,061.5000
0.0000	259,039.00	81,600.00	1,029,055.7000
0.0000	24,200.00	0.00	277,329.0000
10,554,644.8351	11,866,668.29	195,181.00	42,347,776.7751



商品の輸入量の推移をグラフ化したものが図3である。ここから判明するように、その輸入量が多かった品種は、「上白砂糖」や「太白砂糖」・「出嶋白砂糖」であり、「太黒砂糖」や「三盆白砂糖」・「氷砂糖」などの輸入量が極めて少なかったことが判明する。このうち黒砂糖は奄美三島で砂糖黍が栽培され薩摩藩の専売品となっており、また白砂糖も、高松藩での三盆白砂糖の専売化などに見られるように、和歌山藩・岸和田藩・高松藩・徳島藩・岡山藩・土佐藩の専売品となるほか、伊予でも国産化されるなど、近世を通じて国産化が試みられた商品であった。⁽³³⁾そのため和砂糖の増加傾向は、輸入砂糖との競合関係を生み出し、長崎貿易における会所利潤を圧迫する要因ともなり、幕府は大坂登り高を、文化5年(1808)には1,218,000斤に限り、天保5年(1834)には11,234,657斤余に制限しているのである。⁽³⁴⁾これは長崎会所における輸入砂糖での利益を確保するための政策であり、黒砂糖や琉球貿易による輸入品を巡る薩摩藩と長崎会所の対抗関係は夙に知られるところであるが、⁽³⁵⁾幕府は官営貿易維持のために政策的に和砂糖の上方流入を抑制し、輸入砂糖の価格を維持することで長崎会所を保護したのである。先に見た19世紀前期における輸入量の減少は、18世紀末の寛政期より大坂市場に上る和砂糖の影響とも捉えられるが、しかし天保7年以降

図2.

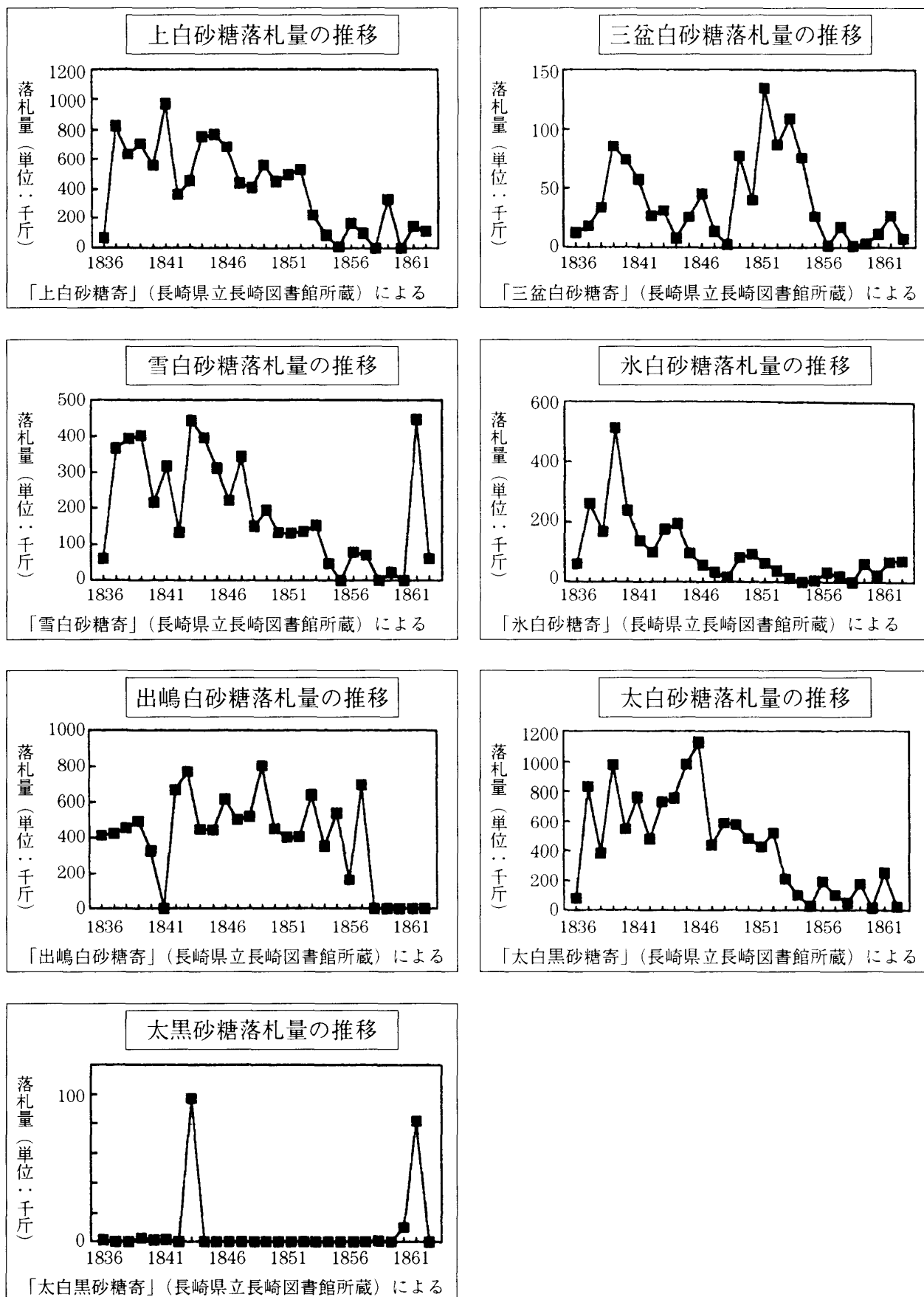
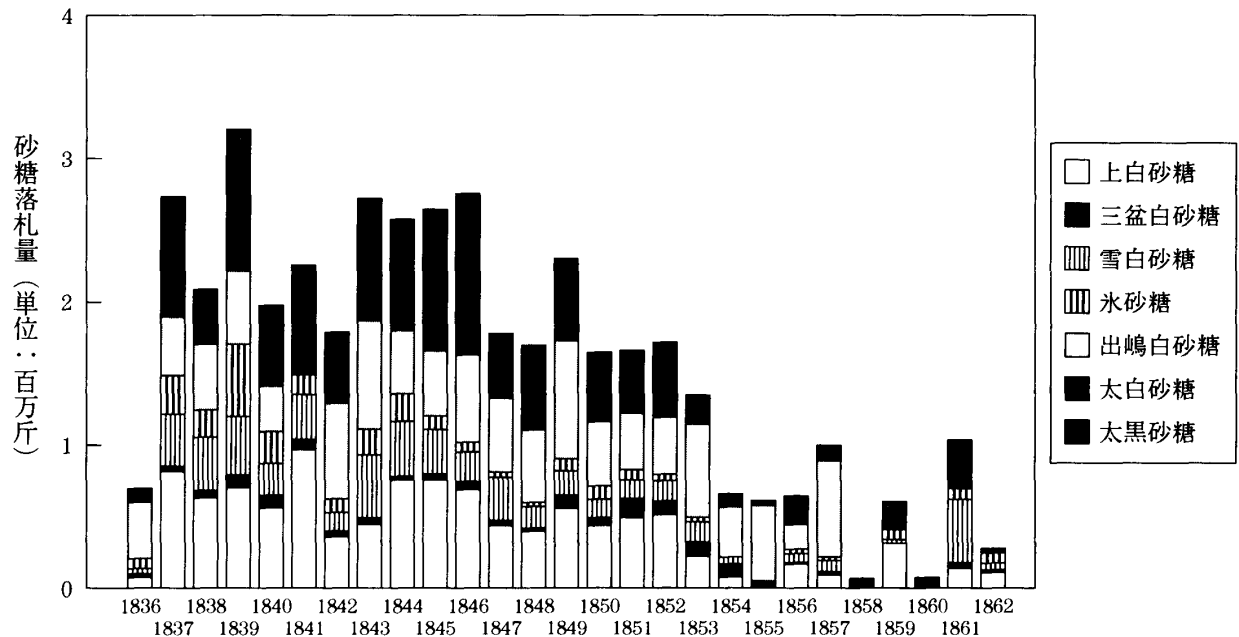


図3. 商品別落札砂糖量推移



典拠：『上白砂糖寄』・『三盆白砂糖寄』・『雪白砂糖寄』・『氷砂糖寄』・『出嶋白砂糖寄』・『太白黒砂糖寄』（長崎県立長崎図書館所蔵）による

の各種『砂糖寄』に見える通り、白砂糖を中心にその輸入量は再び増加しており、国内需要の増大を物語るものと捉えられる。白砂糖の社会的需要の増大は、これらの国産品ではとうてい賄い切れず、幕末期においても砂糖輸入が継続したのである。バラストとして積載するという外国商人側のメリットに加え、国内需要の増大があればこそ、大量の落札量が維持されていたことは間違いないだろう。

まとめ

近世中期以降においては、薬種輸入が、長崎での唐船貿易の主要な取引となっていた。とりわけ近世後期には、輸入薬種のうち痢病治療の効能を持つ薬種の輸入量が増大する傾向が存在する。痢病自体は近世前期より存在したが、とりわけ19世紀に入ってからコレラの日本流入により、痢病治療薬の需要が増大したと考えられる。いっぽう主に天保7年以降の記録を残す永見家文書の『西洋薬種寄』によると、中期に比して西洋薬種は品目を増加させている。このことは、アヘン戦争以降の東アジア海域での貿易活動における勢力交替を象徴するものであろう。

このような貿易動向は、決して国際環境の変化のみの問題ではなく、その背景には、既

に別稿で述べたように、近世前期において貿易の中心であった生糸・反物類が、貿易統制との関係の中で輸入の制限が加えられたことと、近世中期にこれら商品の国産化が進行したことが存在する⁽³⁷⁾。また西洋薬種の需要増大と蘭方医の伸張との関係も考慮すべきであろう。

いずれにしても社会的需要の増大を反映する訳であるから、当然市場との関係を無視することは不可能である。そのため長崎貿易に従事していた「本商人」とか「五ヶ所商人」と呼ばれる落札商人は、その取引の投機性ゆえ、価格や取引量などを示す多くの貿易史料を残し、落札価格の変動や上方市場での相場の変動に対処したのであるが、同時にその投機性ゆえ浮き沈みも激しかったのである。幕藩制的全国市場の中核として組織された上方市場においては、当然のごとく貿易品の集積が行われた。それゆえ同地の市場価格は全国における商品価値を決定するのであるが、単にそのような商品取引関係に止まらず、金融関係などを伴い上方の商人資本に従属する落札商人が多数存在する傾向を生みだした。なかには村上家のごとく、一旦上方商人の名義人となりながらも自分商いを復活させ、嘉永2年に貿易許可を得た8名の商人のなかに参加し得た商人も存在したが、上方との市場関係から、上方商人の支配を受けた商人が多かったことは間違いない。

いっぽう砂糖は、近世後期には国産化に成功し、その大阪登り高は輸入砂糖との間に競合関係を形成していた。そのためこの砂糖貿易は、長崎会所の貿易利潤を確保し官営貿易を維持するという幕府の貿易政策により、特別の保護を与えられ、和砂糖の大阪登り高を制限する方針が打ち出された。砂糖の国産化は、貴金属流出に対する輸入防遏として、新井白石により18世紀初頭に企図されたが、19世紀初頭に藩国家による「国益」のための国産奨励政策のなかでそれがある程度実現した時には、幕府財政機構の一端を担い、幕府による官営貿易機関である長崎会所の利益と競合する形で立ち現れたのであった。しかしこのように砂糖輸入を継続させる要因となったものは、支配者間における市場での競合関係のみならず、近代期へと継続する社会全般の消費生活の発展の中で、白砂糖を中心とする砂糖の社会的需要の拡大傾向があったのである。したがってこのような商品の輸入については、近代までの連続性を視野に入れた日本社会の需給関係から論ずるべきであろう。

以上のように、近世後期の長崎落札貨物の動向からは、近世社会の需給関係の一端が判明し、その背景にある近世社会の状況を認識することができるのである。

註

- (1) 拙稿「幕末期長崎商人間の株移動」(『中央史学』14号、1991年)、同「幕藩制下の商人資本と藩権力」(藤野保先生還暦記念会編『近世日本の社会と流通』、雄山閣出版、1993年)、同「近代移行期の長崎と日朝貿易」(『中央史学』17号、1994年)、同「天保期柳川藩の国益思想と長崎」(藤野保編『近世国家の成立・展開と近代化』、雄山閣出版、1998年)、同「近世東アジア圏内の貿易と国内産業」(箭内健次編『国際社会の形成と近世日本』、日本図書センター、1998年)
- (2) 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』(吉川弘文館、1964年) 参照。
- (3) 拙稿「近世中期の貿易政策と国産化」(曾根勇二・木村直也編『新しい近世史2・国家と対外関係』、新人物往来社、1996年) 参照。
- (4) 山脇悌二郎註(2)前掲書244～245頁参照。
- (5) 『長崎県史・史料編第四』 参照。
- (6) 宮下三郎『長崎貿易と大阪ー輸入から創業へー』(清文堂、1997年) 66・156・251頁参照。
- (7) 森岡美子「近世後半期における長崎貿易の変質」(『学習院史学』3号、1966年)、および『長崎県史・対外交渉編』(吉川弘文館、1986年) 参照。なおこの薬種・荒物の輸入に関する利潤については、中村質氏が、文化9年来航の唐船永茂号船載の数種の薬種・荒物を事例に、詳細な検討を加えられた研究(中村質『近世長崎貿易史の研究』第10章、吉川弘文館、1988年)がある。中村氏の研究によれば利潤の大部分が長崎会所の得分となり、国内の流通過程でのマージンは相対的に微少であり、そのことは輸入薬種荒物取引が投機的性格を持ったことを裏付けるものとされておられる。
- (8) 山脇悌二郎註(2)前掲書297～305頁および『長崎県史・対外交渉編』539頁参照。
- (9) 『長崎県史・対外交渉編』 頁参照。
- (10) 森岡美子註(7)前掲書12頁参照。
- (11) 同前、14頁参照。
- (12) 賀川隆行『近世三井経営史の研究』(吉川弘文館、1985年) 第4章参照。
- (13) 山脇悌二郎『日中貿易史の研究』(吉川弘文館、1960年)、第8章参照。なお大坂市場を中心とした輸入薬種取引に関する研究としては、今井修平「江戸中期における唐薬種の流通構造」(『日本史研究』169号)・同「大坂市場における株仲間発展の一形態」(『ヒストリア』72号)を参照。
- (14) 山脇悌二郎註(13)前掲書第9章参照。
- (15) 馬場誠「長崎村上文書の性格について」(『社会経済史学』4巻11号、1935年)、水原正亨

「近世長崎における両替商の出自について」（『彦根論叢』167・168号、1974年）参照。

- (16) 宮下三郎註(6)前掲書参照。
- (17) 水原正亨「近世の利子率に関する一考察」（『彦根論叢』138号、1969年）
- (18) 水原正亨註(15)前掲書参照。
- (19) 拙稿「幕末期長崎商人間の株移動」（『中央史学』14号、1991年）
- (20) 森岡美子註(7)前掲書参照
- (21) 「薬種寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-183-1～33）、「西洋薬種寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-184-1～16）、「上白砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-188）、「三盆白砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-185）、「雪白砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-186）、「氷砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-186）、「出島白砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-198）、「太白黒砂糖寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-187）、「皮類寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-194）、「鮫鰯寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-190）、「小蘇木寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-193）、「茶碗薬寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-192）、「爪寄并牛馬寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-191）、「唐木類寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-201）、「釵丹寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-200）、「白黒赤熊寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-189）、「綿寄」（長崎県立長崎図書館所蔵、請求番号・郷土17-197）
- (22) 宮下三郎註(16)前掲書264頁参照。なお同書では、永見家の『薬種寄』による唐方薬種を356種、『西洋薬種』による紅毛薬種を203種としている。
- (23) 山脇悌二郎『近世日本の医薬文化』（平凡社、平凡社選書155、1995年）208頁参照。
- (24) 同前、108頁参照。
- (25) 同前、110頁参照。
- (26) 同前、112頁参照。
- (27) 同前、147頁参照。
- (28) 宮下三郎註(16)前掲書、9～11頁参照。
- (29) ただし、幕末期以前の数値は、オランダ側史料に基づく数値であり「輸入量」とするが、幕末期の数値は永見家の「寄帳」に基づくものであり「落札量」と記す。
- (30) 岩生成一「江戸時代の砂糖貿易について」（『日本学士院紀要』31巻1号、1973年）、山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』（中央公論社、1980年）、八百啓介「18世紀における出島オランダ商館の砂糖輸入について」（『史学雑誌』第105編第2号、のち同『近世オランダ貿易と

鎖国】吉川弘文館、1998年に収録）、同「一八世紀後半の長崎貿易における唐物砂糖の流通について」（『九州史学』第121号）。

- (31) 八百啓介『近世オランダ貿易と鎖国』（吉川弘文館、1998年）第7章参照。
- (32) 拙稿註(3)前掲書。
- (33) 原口虎雄「薩摩藩の砂糖」（地方史研究協議編『日本産業史大系8』東京大学出版会、1960年）、市原輝士「讃岐の砂糖」（地方史研究協議編『日本産業史大系7』東京大学出版会、1960年）、吉永昭『近世の専売制』（吉川弘文館、1973年）参照。
- (34) 山脇悌二郎註(2)前掲書238頁参照。
- (35) 上原兼善「薩摩藩における唐物仕法体制の確立過程」（『史淵』112号、1975年）、同「薩摩藩における唐物仕法の展開」（『史淵』113号、1976年）、同「近世中期以降の薩摩藩における唐物仕法の動向」（『日本歴史』345号、1977年）、同「藩貿易の展開と構造」（『日本史研究』215号、1980年）、同『鎖国と藩貿易』（八重岳書房、1981年）、中村質『近世長崎貿易史の研究』（吉川弘文館、1988年）参照。
- (36) 樋口弘『本邦糖業史』（ダイヤモンド社、1935年）346頁参照。
- (37) 拙稿註(3)前掲書参照。